



# 中山 亮さん

有限会社 稚内通信設備 代表取締役社長

## 通信設備は情報化社会の重要なライフライン。技術力と機動力、コミュニケーション力で、どんな時も日本最北の通信網を守る。



写真左、社員で情報を共有するために導入したTV会議システム。右は事務所。現場で働く人たちはかなりなのに、非常にクリーン。



稚内通信設備では施工に最適な自社製品を開発している。先頃、北見市に納品された電柱掘削ケーシングもその一例。電柱を埋設する際に、大きな力を発揮する。

（南）稚内通信設備は、今年平成29年、元旦から仕事をしなければなりません。礼文町で大晦日の午後2時頃火災が発生し、町内の約半数の電話、インターネット回線が不通という非常事態を招いたからです。しかしその日はすでに稚内発のフェリー航路は便がなく、翌朝、光ケーブル断線障害の復旧作業にあたるため、社員は高所作業の特殊車両をフェリーに乗せ礼文島へ向かうことに。到着後ただちに復旧作業を開始し、まだ陽が高いうちに無事すべての通信網が正常に機能。これで礼文島の電話、ファクシミリ、インターネット回線が、平常通りに稼働しはじめました。しかし、もしもこのような災害時に、宗谷管内に稚内通信設備のような会社がなかったとしたら？

### 私たちに使命感がある

父が旭川の通信工事業社を辞め、稚内で創業したのが昭和61年。キッカケは、その前年の春、電電公社からNTTへの民営化が図られたことに関係します。その際に仕

事量がガバッと落ちてしまっ、父が勤めていた会社が、稚内から撤退するということになってしまったのです。同時に民営化に伴い、宗谷管内に点在していた電電公社の窓口（稚内、天塩、枝幸、浜頓別の営業所）の人員整理も始まりました。やがてそれらの営業所も閉鎖するという話が出てきました。そうすると「誰か、この地域の保守業務をやってくれませんか？」ということになり、私どもの仕事の現在の元請けである「㈱つうけん」さんの支店長から父にお鉢が回ってきました。「支援

するから稚内でもやってもらえないだろうか」。それで稚内での独立を決めたのです。

ちょうど先日父に「あの時、なぜ旭川に帰らなかったの？」と尋ねたのですが、すると「俺は稚内が好きなんだよ。みんなが良いだろう？彼らの住むこの地域を守りたいと思ったんだろうな。見放すことなどできなかったさ」と。

父の時代の電話の通信ケーブルは、メタルと呼ばれる銅線のアナログ回線でした。それを手捻りで繋ぐという仕事を引き受けていたのですが、昨年創業30周年を迎えた現在の当社が手掛けているのはデジタルの光ケーブルが主流で、仕事の分野も大きく広がり、電柱

## 私のモットー 思考は現実化する。

「人は、"どうしたい"と思った時から、そのようになるように、夢に向かって"どうするか"を思考します」



### 社員は家族という考え方

私を建て、ケーブルを張り、それを繋ぎ、古い設備を撤去する。あるいは地下ケーブル埋設も含め、総合的な通信設備工事業社へと成長を遂げました。それでも、父の時代と変わらないものが一つだけあります。それは地域に対する使命感です。何かあった時の復旧作業、保守業務に責任を果たし、通信という情報化社会に必要な不可欠なライフラインを守らなければいけないという使命を担っているのです。この最北の地でも、現在はインターネットで仕事をしている人が沢山いますし、普通の人も日常的にネット環境を必要とする時代です。から、万一ここで何かあったらどうしますか？ということなのです。火災などの災害によって断線や故障が発生したら、旭川の業者に頼みますか？それともわざわざ札幌から来てもらいますか？その問いに対する答えが、我々がこの地域に根を張る理由なのです。

宗谷管内の守備範囲は広いですが、日本海側は初山別の手前まで、国道40号は天塩中川の手前、238号だと雄武の手前までが保守エリアで、災害が発生すると、例えば元旦でも離島へ復旧に駆けつけます。

私が社長になったのは38歳の時でした。なぜその若さで引き受けられたかと言いますと、元請けの㈱つうけんさんが「若返りを図る構造改革を行う」という噂が飛び込んできたからなのです。私も常々10年後、20年後というスパンで業界を展望する時に、危機感を持っていたこともあり、父に「うちも思い切った改革をしよう」と言ったら「じゃあ若いお前が先頭に立ってやればいい」と。交代にあたって父が出した条件は一つだけでした。「元請けよりもそれを早くやれ」。

実際に、道北管内には同業者が15社ほどあるのですが、そのほとんどの社長が60歳以上でした。さらに若返りを図るという意味では、業務の複合化（全員が知識も技術も掌握したスペシャリストへ）にも業界に先駆けて取り組みました。以来、前代未聞の新しいことに挑戦し続けてきました。また、ここよりも最新型の高所作業車を導入し、それを毎年1台ずつ新型に入れ換えました。それが今では15台高価なものだと1台1千万円以上もします。同業の中には、車両不備の作業車じゃないかと思われる

この仕事は現場主義ではありませんが、社会に対してIT化を謳ってきたからには、自らも率先してインテリジェンス化に向かわなければとも思い、書類のペーパーレス化に向け、パソコンも一人一台としていきます。現場の写真も工事ごとにフォルダで管理し、メール添付でスムーズに届けています。

さらに、当社には父の代から「社員は家族」という考え方があります。イザという時には、経営者よりも優先して彼らの生活を守らなければならぬのです。逆に、社員にも家族の一員としてルールを大切に守ってもらいます。それは「整理整頓を心掛け、ムダをなくす」という約束事です。そのため当社では、倉庫に道具や部品を分野ごとに収納し、出し入れを全員でしっかり管理しています。最悪なのはモノを現場に置き忘れたり、紛失することです。



使命感があるから。復旧速度は他社の追従を許さない。



日本最北の礼文島での災害復旧作業現場にて。極寒の通信設備を守る彼らは、まさに北の防人たち。



優れた技術力を持った社員と常に最新の機械を備え、どんな高度な施工にも対応。